

H23 年度 NGO 補助金

プロジェクト調査事業

インドネシアの伝統的影絵「ワヤン」を活用した啓発活動
に関する調査報告書



2012 年 3 月

特定非営利活動法人

ストップ結核パートナーシップ日本

Stop TB Partnership Japan (STBJ)

1.背景

「結核」はインドネシアでもっとも深刻な病気の一つで、世界保健機関（WHO）2011年の報告によると罹患率10万人あたり189人、有病率289人、死亡率27人と世界で指定された高まん延国の一つである。

インドネシアでは結核が死因になったことが長く続いており、1969年に旧保健省の感染症対策・環境保健総局が国家結核対策プログラム（National Tuberculosis Program : NTP）を策定した。以来、長期に渡り結核対策に取り組んでいる。

また、1994年にはDOTS戦略を始め結核が減少するよう取り組んでいる。

＊DOTS戦略 (Directly Observed Treatment, Short-course; 直接監視下短期化学療法) とは、

- ①感染源として重要である喀痰塗沫陽性患者の治療を優先すること
- ②患者が薬を飲み込むところを医療従事者が毎回確認すること
- ③結核患者に適正治療を提供し、治療経過と治癒を評価すること
- ④抗結核薬の供給体制を整備すること
- ⑤政府はDOTS戦略を指示し、高い優先権をあたえること の5項目である。

結核対策が困難である理由の一つに、結核患者の診断の遅れがある。結核に感染していることに気がつかず、多くの人々に感染してしまう可能性がある。また、治療には最低6カ月の服薬が必要とされているため、治療を途中でやめてしまい周りに感染させてしまう可能性や、自身が耐性菌を持ってしまう「多剤耐性結核」になる危険性もはらんでいる。さらには、結核が空気感染する病気であるため、患者が家族や友人、職場や地域から疎外されるケースも稀ではない。そのため、人々に結核の知識を広く周知することは重要な活動の一つである。さらに、結核の治療では、WHOよりDOTS戦略が推奨されており、薬を飲むのを管理する人は、身近な人（家族など）が登録されている。このように、周囲の理解や協力を必要とする病気であることから家族やコミュニティの結核に対する正しい知識や理解を深めることは不可欠である。

結核の啓発活動は様々な形で行われているが、その一つに音楽やドラマなどの娯楽性を交えた活動がある。人々はテレビドラマやラジオドラマ、音楽などによって影響を受ける。このようなエンターテインメントを活用した啓発活動は、教育としての効果（エンターテインメント・エデュケーション（E-E））がみられると言われている。エンターテインメント・エデュケーション（E-E）とは、「ヘルスコミュニケーションの戦略的方法」とされており、「聴衆の教育的な課題に関する知識を増やし、それに対して（改善に向けた）好意的な態度、社会規範を醸成し、行動変容を促すためにエンターテインすると同時に教育するためのメディアのメッセージをつくり実行する過程」とされている。

その媒体によって期待される効果は、主に「ロールモデル」による疑似的な学習（良いモデル、悪いモデル、変化を成し遂げるモデル）である。これらのモデルに感情移入し、メッセージがより心に響く。また、ロールモデルの設定が身近であり、妥当性があると自分に引き寄せて考える効果がある（Singhal & Rogers,2004）。

開発途上国におけるエンターテインメント・エデュケーション効果の研究では、テレビドラマ、ラジオドラマ、音楽を通じて家族計画や男女平等、HIV/AIDS 防止などの要素を取り

入れたものが効果をもたらしたとされている。

1994年に作成されたテレビドラマ、南アフリカの「Soul City」では、母子保健、HIVの感染予防と管理、1996年にはHIVおよび結核の予防と管理、住宅と都市改造、アルコール依存症、家庭内暴力など、ストーリーに公衆衛生の問題、社会問題等を含んで作成され、人気を集め人々に大きな影響を与えた。

今回の調査は、エンターテインメントを通じて行われる啓発活動のツールとして、インドネシアの伝統的影絵「ワヤン」の効果について焦点を当てて行う。ワヤンとは大きなスクリーンを前に皮製の人形を使ってストーリーを伝えるものである。インドネシアのジャワ島を中心に、千年以上の歴史を持つ伝統芸能である。ジャワ諸国の宮廷で生まれ、15～16世紀ごろには次第に民衆の中にまで広く普及し、インドネシアの人々の精神文化の核となった。人形を操るダランは、一人でワヤン人形を操り、語りながら「ガムラン」というインドネシアの民族音楽の楽団へ曲目やテンポを指示し、物語を進める。ダランは特別な才能を持つ人として人々の尊敬を集めている。

現在でもワヤンは、誕生・成人・結婚といった人生の節目や、町や村の節句などの場で、厄払いや魔よけの意味を持ち、盛んに上演されている。また、現地のワヤン会場のまわりは、食べ物やおもちゃなどの屋台が出て、縁日のような賑やかさがあり、大人から子どもまで集まり、楽しむ場ともなっている。

このような背景から、「ワヤン」を啓発ツールとして活用するのには、

- ①「ワヤン」がインドネシア（特にジャワ島）文化、生活、思考様式に根ざしていること
- ②ダラン（人形遣い、進行役）の人々への影響力が大きいこと。

（①②参照『ジャワ人の思考様式』 マルバグン・ハルジョウィロゴ 1983）

- ③識字率に影響されない。

- ④エンターテインメント性（伝えづらいメッセージも楽しく伝えることができる）

といった効果が考えられる。

2.調査

A.過去の事例の検証（2003-2005）

1.事業が始まった経緯

＝関係者＝

AKARAWA community(演劇グループ)：

インドネシアで有名な芸術家Wahyu.Sulaiman.Rendara（1935-2009）が主催していたグループ。劇作家や詩人、小説家などとして活躍した。社会問題に対する批判を含む作品も多く、思想を重視した活動を中心に行っていた。現在は夫人Ken Zuraidaが主催者となっていて活動が継続されている。現在のメンバーは60名程度。

World vision Indonesia：

国際NGO。1950年キリスト教精神に基づいてアメリカ人宣教師ボブ・ピアスによって設立された。インドネシア国内では、母子保健やエイズ、収入向上プログラムなど現在48箇所では活動をおこなっている。

国立結核プログラム (NTP: National Tuberculosis Program) :

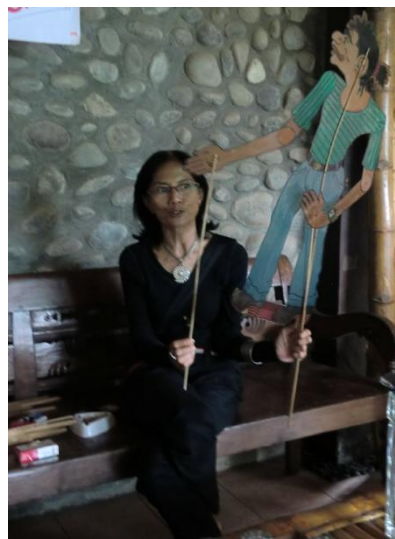
保健省の管轄にある公的組織。インドネシア国内の結核対策を行っている。

ストップ結核パートナーシップ インドネシア :

ストップ結核パートナーシップ日本のように独立したNGO組織ではなくNTPの中に存在し、NTPのスタッフが事務局を担当している。

1992年にAKARAWA communityのメンバーが結核を発症し、長期に渡って治療をおこなったが、後に亡くなった。これをきっかけにAKARAWAは、知り合いの医師 (Dr. Zulkilfi) から地域の人々を対象とした結核の診断検査を勧められた。

この出来事をきっかけにAKARAWAはコミュニティへの結核に関する啓発活動の重要性を認識した。Dr. Zulkilfiを通じて保健省、NTPに連絡をし、啓発活動をすることを始めた。活動が行われた2003-2005年の期間中もインドネシアは、結核高まん延国とされており、その問題に取り組む必要性は高かった。保健福祉省感染症対策・環境保健局によって作成された「2001-2005年の国家結核対策5カ年計画」などの国の政策では、「DOTSが全ての保健所及び病院で実施され、70%患者発見率と85%の治癒率が達成される」を目標としていた。NTPへの提案をもとに、結核に関する知識を市の衛生部 (District Health office) からアドバイスをもらって、AKARAWAの周辺地域 (ジャカルタ市内から南、Depok市周辺) の約2万4千人を対象に家庭訪問を開始した。地域の人々には保健所が主体となって結核に関するセミナーが実施されていたが、セミナーの内容は難しく、結核に関する理解を得るのは難しかった。そこでAKARAWAは、人々に結核の情報を正しく伝えるために、NTPへワヤンのような活動によってメッセージを伝えることを提案した。



AKARAWA のスタジオ (Bengkel Teater) および住居にて。Ken Zuraida さん (人形を持っている) や AKARAWA のスタッフの方々より活動の経緯などを聞いている様子。

2.事業が行われた経緯

活動は、AKARAWA,保健省、NTP、WHOを中心に2003年1月より準備を開始。まず、WHOのオフィサー（当時）の医師、Dr. Roosyana HasbullahはAKARAWAと脚本作成をした。脚本は10回に渡り編集され、完成した。演劇は伝統的神話に基づき、皮製品を使ったものではなく、オリジナルストーリーを作成し、人形はゴミとなったプラスチックを原料として作成された。

ストーリーは20分程度で作成され、10分は質疑応答。30分は専門家（医師や保健師など）から説明があり、最後には結核に関するパンフレットが配布された。全体で1時間程度。パンフレットはワールドビジョンインドネシアから支給された。

ストーリーの登場人物は、4人

- 1) 屋台の中年女性：イスラム教徒で一般的な庶民の女性。
人々が立ち寄り、様々な体験話を行う。
- 2) もと大学生の男性：大学を退学した学生。のちに地域の人々を助ける。
- 3) 若い女子大学生：セクシーで歌と踊りを行っている。知的な女性。
- 4) 警察官：スマトラ島から来た下級公務員。ジャワ島へ来た当初は車の修理を行っていたが、制服にあこがれて警察官になる。非常に人情味がある理想的な人物。

ストーリーは、どのように病気が感染するのか、結核の主な症状、健康的な生活習慣、結核の疑いのある人はヘルスセンターや病院で検査を受けること等が説明され、DOTS戦略のもと、適切な治療によって完治すること、のろい等ではないこと、そして、患者への差別などについて構成された。

中でも強調されたメッセージは、

- 1) 結核は、親から子どもに遺伝するものではない。
 - 2) 結核は、“のろい”ではない。
 - 3) 結核は治る病気である。
- の3つである。

WHOオフィサーは、脚本作成にあたり芸術家の方々の意識を変えるのが非常に難しかったとコメントを残した。



右から元 WHO のオフィサー Dr. Roosyana Hasbullah さん、今回の調査現地調査の協力をしてくれた元 WHO の結核オフィサー Dr. Irawan Kosasih さん、STBJ 下谷、STBJ 宮本次長

3.運営方法

最初は、2003年3月24日の世界結核デーをきっかけに活動を開始。

実施団体：AKARAWAのメンバーによる4チーム（4～7人で編成）。

保健省、NTP、WFP、ワールドビジョンインドネシア NGO、
コミュニティーの人々。

対象地域：ジャワ島（ジャカルタ、ボゴール、タングガラン、ブスキ）

スマトラ島、カリマンタン島、マルク、北マルク

人口、学校が多く、患者発見率が低いところを活動地域に選んだ。

実施場所：ジャカルタ・コンベンションセンター（約20名が実施）、学校（中学、高校）、
Pesantren（イスラム教を教える場所）、サンガ：公民館的な場所、駅裏など。

AKARAWAの活動の目的は、TBのスローガンを伝えることであったが、多くの結核患者が貧困にあり、栄養状態に対する正しい知識がない為、それに対しても支援活動を行った。活動を行った当時（2005～2007）は、WFP（世界食糧計画）が結核対策を支援し、患者一人に対して1キロのお米と1000ルピアの交通費を支給した。また、W. S. Rendraを支援する裕福な人々からの資金援助を受けた他、PARAMという現地NGOによって卵、牛乳、サラダオイルなども支給された。これらは、多くの人々を集めるためのインセンティブとしての効果があったと考えられる。

また、啓発活動を行うにあたっては、地域のキーパーソンの協力が不可欠であったため、各地域のインフォーマル・リーダーにアクセスし地域への働きかけをおこなった。インフォーマル・リーダーとは、イスラム教徒の僧侶や、キリスト教の神父・牧師、学校の先生、地域の婦人会PKK（主に公務員の妻などが所属）などで、彼らによる情報は地域からの信頼もあり、コミュニティへの介入に重要な役割を果たした。

NTP スタッフとの打ち合わせの様子。NTPのスタッフのACASIAホテルでの会議の合間に話しかった。



4.経費について

2003～2005年に実施されたワヤンの活動において、正式な報告書が残されていないため、残念ながら実際の経費について把握することはできなかった。

担当者が記憶している経費では、目安として、きっかけとなった2004年の世界結核デー

（3/24）と5つの小中学校で活動を行った場合、約1億ルピア（約1,000,000円）である。この予算は、当時NTP（保健省）が実施していた世界基金ラウンド1から負担された。

その後の地域での活動やいろいろな島で行った活動は、AKARAWAが中心となり、彼らの

活動を支援している人々によって負担された。

世界結核デーと小中学校での活動については、NTPが会計を行い、AKARAWAは活動報告を提出。（現在、NTPに報告書を探してもらえるよう依頼中。）その後のAKARAWAの会計については、知人の会計士によって行われた。会計報告書の入手は不可。

5.啓発活動の効果について

WHOのオフィサー（当時）Dr. RoosyanaやNTPのスタッフによると、啓発活動を実施した後、患者発見率と治療完了率が上がったとされている。具体的な数字の入手は不可。地域の人々からは内容が分かりやすいとの意見があった。

AKARAWAの活動の一環として最も大きな活動の一つにクリニックの設立がある。2004年より保健省からの正式な依頼により、クリニックがAKARAWAの敷地内に設立された。クリニックは、保健所から継続的な支援を受けており、週3回の医師の訪問があるほか、毎日検査技師が喀痰検査スライドを集めにやってくる。活動が始まった当初は、約30人にも上るボランティアが活動に参加し、地域が活発に啓発活動に取り組んだ。現在、ボランティアは2名にまでに減少したが活動は続けられており、現在35人が治療中で、一日平均5人がクリニックを訪れている。



左：AKARAWA の敷地内にあるクリニック。右：クリニックの中。AKARAWA のスタッフの一人でもあり、ボランティアとして働いている。

また、今回のAKARAWAの活動は、多くの関係者（WHO、保健省、NTP、WFP,ワールドビジョンインドネシア、地域のNPO “PARAM”、地域の人々など）を繋げる役割を果たしている。政府からの働きかけの多くは草の根まで届かないことが多い中、彼らの活動によってボトムアップの効果を生み、関係者の連携をもたらした。

B.結核に関する取り組みについての調査

地域における結核の啓発活動の状況把握のために、インドネシア結核予防会（PPTI）を訪問した。PPTIは、結核/肺病に関する予防活動（保健教育など）に特化した活動を行うインドネシアのNGOである。ストップ結核パートナーシップ日本の主要組織である公益財団法人結核予防会は2004年から支援を続けている。インドネシア結核予防会からの情報を参考に地域におけるボランティア活動の構造を説明する。

インドネシア結核予防会 (PPTI: Perkumpulan Pemberantasan Tuberkulosis Indonesia)

1968年5月20日にジャカルタに設立。

IUATLD（国際結核肺疾患予防連合）のメンバー国であり、非営利活動組織（NGO）で、16地方の77箇所に支部を持つ。ジャカルタには2つのクリニックがある。

1998年に政情が不安定になって、33provinceniに100あったPPTIの支部は現在の数に減少した。

活動は、コミュニティレベルにおける結核/肺疾患に関しての保健教育、及びその他のためのスタッフトレーニング、貧困層の結核患者とその家族に対する社会的な支援、PPTIクリニックにおける結核患者の予防/治療活動、結核の社会文化的側面についての調査を行っている。



左：PPTI ジャカルタ事務所



右 PPTI の事務局長（中央）らとの打ち合わせの様子。



左：PPTI 内にある結核専用の薬局。右側に扇風機があり、風が外に流れるようになっている。



右：薬局内、結核の薬と患者記録。

インドネシアに保健医療機関は、治療を中心とする公立病院と、より地域に密着して治療および予防衛生活動などを行う保健所（Puskesmas）およびその他の地域住民参加型施設に大別される。（参照：図1保健衛生行政組織）このレファラルシステムに沿って、結核の診断や治療が行われている。

保健所は、臨床サービスの他、病気の予防・健康増進活動も行い、地域保健活動の拠点として機能している。通常、医師1名、歯医者1名、看護師、助産婦、検査技師等がおり、地区病院へのアクセスが制約されているところには、有床保健所（全体の約2割）もある。

準保健所には、看護師、助産師、衛生士などが配備されている。

結核や母子保健、家族計画、栄養改善などの特別プログラムについては無料となっている。

WHOの推奨するDOTは、患者の服薬を医療従事者あるいは訓練を受けたボランティアが確認する方式である。患者は初期強化療法期間（治療開始から2カ月）中も入院治療は受けず、1週間に1度保健所に通院して医師の診察を受け、1週間分の抗結核薬を受け取った後、自宅で服薬監督者（PMO）の直接監視下において抗結核薬を服薬する。誰をPMOにするかは患者自身が決めることができ、通常は家族、親戚が選ばれるが、インドネシア結核予防会（PPTI）と連携して活動している保健ボランティアになる場合もある。

PPTIは、PKKと契約（MOU: Memorandum of understanding）を交わし地域における活動を委任している。PPTIがPKKのスタッフを研修するなどを行い、実際の地域における活動は保健ボランティアが主体となって行っている。

地域の保健ボランティアはカーデル（CADER）とよばれ、数多く存在している。CADERの多くが婦人会PKK（Pendidikan Kesejahteraan Keluarga）に属しており、メンバーは公務員妻などが中心で、高度な教育を受けていることが多い。ボランティアの活動は基本的に無償で行われており、保健所（Puskesmas）の補助的な役割として地域で大きく活動が行われている。地域の中には教育を受ける機会が少なかった人々も多く、医療に関する知識をあまり持たないことから、保健ボランティアへ相談するなど地域にとって大きな役割を果たしている。

*** ボランティアに啓発活動が活発な地域**

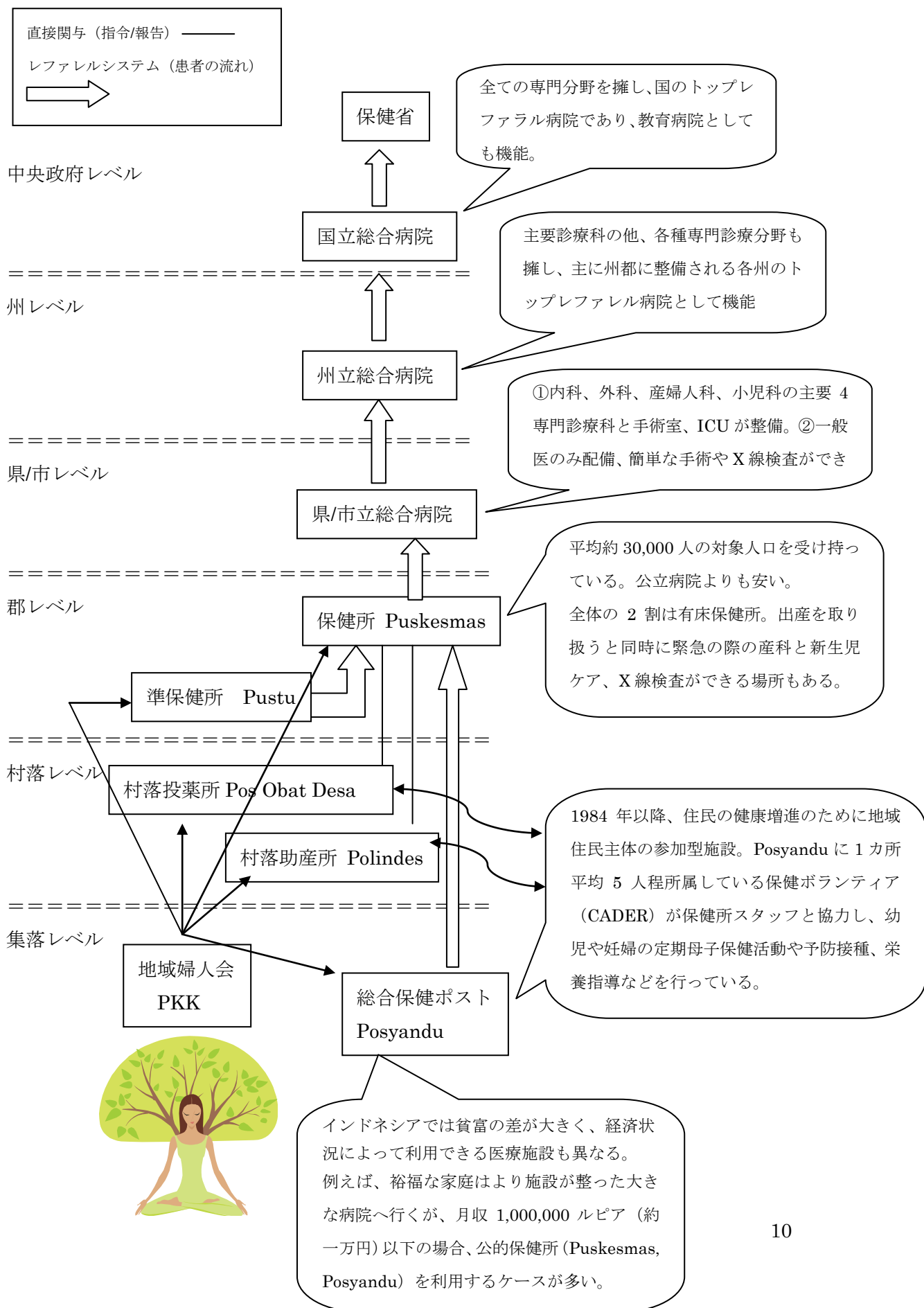
西ジャワにおいては、ボランティアにおける啓発活動が活発に行われている。

西ジャワは現在世界基金のラウンド5（2009～2011）のサブ・レシピエント。Chimahiという町で活動が行われている。

ボランティアによって患者のマッピングがされており、それに従って活動が行われている。PPTIは地域を訪問し、チーム作りを依頼。PKKなどを中心としてチームがつけられている。ボランティアを対象としたトレーニングを実施し、結核に関する教材を渡す。実施の方法についてはボランティアに任せている。経費は、ボランティアの交通費やミーティングの時のお茶代などのみ負担。

以上から地域における結核に関する啓発活動は、地域の保健システムとボランティアの連携が地域の結核対策に重要な役割を果たしていることが分かる。

図 1.保健衛生行政組織



C.「ワヤン」活動全体の状況把握。

テレビの普及、放送番組の多様化、インターネットの普及など、「ワヤン」の演じられ方や「ワヤン」を取り巻く環境も変化している。効果的に「ワヤン」に「結核啓発」を取り込む方法や、もしくは、「ワヤン」が啓発活動に本当に適しているのかを確認、検討した。



インドネシア・ワヤン協会 SENAWANGI のみなさんと。



左：ワヤンの歌手（プシンデン）狩野裕美さん 右：ガムラン奏者 芹澤薫さん

伝統的ワヤンとは・・・

ワヤンとは、インドネシアのジャワ島を中心に千年以上の歴史をもつ伝統芸能である。ジャワ諸王国の宮廷で生まれ、15~16 世紀ごろには次第に民衆の中にまで広く普及し、インドネシアの人々の精神の文化の核となった。2003 年に UNESCO (国連教育科学文化機関) はインドネシアのワヤン (無形文化遺産) として登録された。登録の理由としては、インドネシアのワヤンが昔から広く人々に好まれ支えられてきたことや高尚な芸術であるために人々の役立つように保存・発展させられなければならないことがあげられる。

ワヤンのストーリー題材の多くはインドの古代叙情詩「マハーバーラタ」や「ラーマヤナ」から採られ、ジャワ語で行われる。ストーリーのドラマの中に生きる人々の姿は、思春期、青年期、そして老年期という段階のなかで人間が直面するトラブルのなかにある善悪や喜怒哀楽など人々の内面に訴えかけるものである。

上映の機会は、魔除儀礼、祖霊供養、浄村儀礼、通過儀礼、快気祝、落成祝、諸記念などで演目もふさわしい内容が選ばれる。上映は人形使い・進行役である「ダラン」によって構成される。ワヤンは、1) 原版とはかなり異なったもので、意図的な歪曲を含むのが常であったこと。2) 時代精神に強い影響を受けて変わり続けてきており、イスラム教の要素などが含まれており、宗教との関わりが深いこと。3) 口頭伝承による芸能であるため、確定した「台本」には支配されないことといった 3 つの要素があり、ダランの解釈や風刺などを盛り込むことができ、演出によってもそのスタイルは異なる (芹澤薫,1999、「ジャワガムラン スラカルタ編」)。

ワヤンは音楽とともに構成され、青銅製打楽器群を主体として両面太鼓クンダン、二弦琴ルバブ、堅琴シトゥル、笛スリンなどで構成されるガムラン演奏、歌ともに行われる。

マスメディアが発達していなかった時代のワヤンは、効果的なメディアとして機能していた。伝えられる情報は宗教的な教えや人生哲学の他に政府の方針や地域のニュース、スポンサーの宣伝など多様である。音楽とともに楽しみながら情報を受け取ることができた。これらの情報を伝えるダラン (人形使い、進行役) は、地域の人々から尊敬されており、彼らの意見が反映されたワヤンの影響力は大きい。

現在、都市部でのワヤンは大きな公園などの舞台で政府や企業のキャンペーンなどが多い。一方、地方では現在でもワヤンがさかんに行われている地域 (ソロ・スラカルタなど文化的つながりが深い土地など) があり、地域の人々を集める要素は大きく、とくに高齢者に根強い人気がある。

ワヤンは、一般的に夜の 9 時ごろに始まり翌朝の 4 時ごろまで徹夜で上演されるが、最近では夜半過ぎに終わる 4 時間ほどのワヤンも度々上映されるようになっている。

ワヤンには上映の途中に「遊び歌」として「リングアン」10:30~12:30 と「ゴロゴロ」13:30~14:30 が 2 回上映される。これらは小話としての要素をもち、「ラーマヤナ」などの主題とは別のテーマをダランが説明する。伝統的なワヤンの上演では、ゴロゴロは主人

口の英雄が困難にあっているか、難題を果たしているときに見せられる。ゴロゴロは一つの変化であり、悪い行いから良い行いへ、混乱から規律へ、そして間違っていることから正しいことへの変化を意味する。

ゴロゴロの上演は、時に啓発に関する分野の専門家が出てきて説明があり、ダランやときには観客との対話で質問などが行われ、参加型で行われることもある。また、ワヤンのストーリーに登場するひょうきんなキャラクターに情報を語らせる場合もある。



左：ダラン（キ・マンタブ・スダルソノ）によるワヤン上映の様子。

右：ワヤンにともなう演奏。（ガムランや太鼓、歌など）

キャンペーンとしてのワヤン

現在、都市部でのワヤンは大きな公園などの舞台で政府や企業からのキャンペーンなどが多い。一方、地方では現在でもワヤンが盛んに行われている地域（ソロ・スラカルタなど文化的つながりが深い土地など）があり、地域の人々を集める要素は大きく、とくに高齢者に根強い人気がある。

近年、主催する都市部における活動は、企業が主催する記念イベントや銀行による偽造貨幣防止キャンペーン、環境問題、正当によるキャンペーンなど政治的メッセージなどにも使われている。インドネシア・ワヤン協会は、キャンペーンの事務局として存在しており、企業や政府などの出資者とともにダラン（人形使い・進行役）に依頼をして、活動を実施している。

インドネシア・ワヤン協会(略：セナワンギ、SENAWANGI)：非営利の国立組織。ワヤンを国家文化の柱として発展させることを目的としている。1975年に設立。様々なワヤンや人形劇組織やワヤン教育施設、芸術家、文化愛好者、有名人で構成されている。出資者は、インドネシア国内、海外などの企業や政府など。

＝薬物・HIV/AIDSの防止キャンペーン＝

期 間：2005年1月から3月

関係機関：インドネシア・ワヤン協会(略：セナワンギ、SENAWANGI)、インドネシア人道委員会(KKI)、STOP AIDS〈エイズ予防〉運動(ASA/USAID)・Land O Lakeの協力

実施場所：西ジャワ、中央ジャワ、東ジャワ、ジョグジャカルタ特別州

内 容：18人のダラン(人形使い・進行役)を集めてワークショップを開催。

インドネシア・ワヤン協会から薬物やHIV/AIDSに関する知識を伝えて、各ダランが情報を組み込んだストーリーを作成。

プログラムのミッションは、ダランたちによって順調に実行され、メッセージを明瞭に伝えることができた。ダランたちはそれぞれのスタイルで、多くの住民に「ジェジェラン リムブカン ゴロゴロ」(jejeran limbukan goro-goro)の場面で冗談を交えて伝えることを試みた。そのため、基本的な物語と物語の展開を壊すことなく上演が成功。

観客は薬物とHIV/AIDSに関する知識が深まった。(報告書より)

経費

ワヤンを行う費用は、インドネシア・ワヤン協会を通じて行う場合とダラン自身に直接支払いをする場合がある。ワヤン上映には、ダラン自身への出演料に加えて、ガムランや歌など音楽奏者たちの費用、上映設備、集まった人々へ食べ物を配るなども一般的に行われている。また、ダランの経験や有名な度合いによって価格が異なる。インドネシア・ワヤン協会の薬物/HIV・AIDSのキャンペーンでは72,000,000・ルピア、今回インタビューを行ったダランの場合は、規模にもよるが、一晩あたりダランへの謝金100万円、その他の経費5-60万円など高額な出演料が必要とされる。

メディアにおけるワヤン

メディアへの露出は、文化の街であるジョグジャカルタの地方局では、ワヤンに関するテレビも放送されている。また、有名なダランが大きな広場で講演を実施する時は全国ネットのテレビ局によって放映されたりもする。

ワヤンは基本的にジャワ島を中心としてジャワ語で行われるものであり、地域によってはワヤンが行われない地域もあり、その効果は地域性に依存するとも言える。

また、若い世代はメディアの発達にともない



左上：有名なダラン(キ・マンタブ・スダルソノ)のご自宅。

伝統的文化から新しい文化（歌謡ポップスやロック、TV、映画など）への興味が強いと言われており、若い世代へのアプローチとしてワヤンを2-3時間の短いものにするなど、歌謡曲を取り入れたりして作品に工夫を凝らしている。



有名なダラン（キ・マンタブ・スダルソノ）ご本人のお宅にて。練習場とワヤン人形の作られる様子。

結論&考察

今回の調査では、主に大きく二種類の結果が得られた。一つは、ワヤン的なアプローチを使い、新たに登場人物やストーリーを組み立てて作成された演劇グループAKARAWAによる啓発活動。AKARAWAの働きかけによって地域に密着した活動が展開された。彼らの活動の特徴は、コミュニティの中の結核に関する知識があまりない人々を対象としていることである。経済的に貧しく、栄養状態も良くない中で結核に関する知識もない（多くの場合、これらの人々は教育を受ける機会がなかった場合が多い）というハイリスクグループにとって最も手軽に、かつ分かりやすく伝わる手段としての効果があったと考えられる。また、彼らの活動は新たに機材などを購入するのではなく、ゴミをリサイクルするなど経費削減および環境が考慮されている。

この手法は、ワヤンの伝統にこだわらないため、多言語国家であるインドネシアの中でも地域を選ばずに活動を行うことができた。この伝統の文化を用いたオリジナリティある活動は今後も活用できると考えられる。

また、彼らの啓発活動は世界結核デー後のクリニック設立に始まり、数多くのボランティアを巻き込んだ上、いくつかの関係者（WHO や MOH, 国際 NGO、現地 NGO、地域ボランティア、Rendra の支援者など）からの協力も得て、活動をより大きなものとした。その後も保健所と連携は続いている。彼らの活動がこのような形で広がったことは活動にとって大きなインパクトであったと思われる。コミュニティにおける保健所との連携は積極的な患者発見や治療脱落防止等の地域のレファラルシステムの強化に寄与する可能性もある。二つ目は、伝統的なワヤンを用いた啓発活動。伝統的なストーリーはダランによって演じられ、遊び歌の中で啓発的内容を伝える。伝統的文化に基づくストーリーによる構成は、ジャワの文化に深くかかわっており、ダランによって行われる人々への影響は大きい。最近では何人かのダランがジャワ語だけではなく、インドネシア語に訳してストーリーの上映や、新しい音楽を取り入れるなどの試みも行っている。彼らの活動が地域だけでなく、大きなホールや公園での開催や、メディアなどによって紹介される場合、より広範囲の人々にメッセージを送る効果も持っている。

エンターテインメント・エデュケーションによる戦略は、「人々に知識の増加や態度の変化を目的としたメッセージの提供だけに留まらず」、行動変容を起こす動機づけとなる。新しい考えの認識から、その考えに対するポジティブな態度の形成を通して、その考えの導入と実践に至る過程を示す。」また、視聴者は仲間同士の会話を誘発する媒介的な効果があり、互いが話し合うことを促す。前途の二つの手法は、啓発活動においてそれぞれに効果があると考えられる。特に前者は実践されたものでありながら一過性の活動で終わっており、正式なモデルとして残されていない。エンターテインメント・エデュケーション戦略の効果として、「ポジティブとネガティブな登場人物との疑似社会的相互関係と、そのロールモデリングの結果から生まれる」要素を取り入れ正式なモデルとしての「型」をつくられることができれば、その効果はさらに大きいと考えられる。

インドネシアの結核対策は、「NTP Strategic Plan 2006-2010」が戦略として立てられている。2005年までの目標（85%治療成功率、70%患者発見率）を維持し、2015年までに90%患者発見率と88%治療成功率の達成を目指している。

戦略の一つである『患者教育の改善と地域社会の啓発』では、1.) アドボカシー/啓発活動（Advocacy Communication, Social Mobilization : ACSM）実施する為の人材育成と2.) メディアキャンペーンがある。すべての行政区の結核対策チーム（国、州、郡レベル）に対してACSMに係る研修を実施し、アドボカシー活動の為のモジュールやツール開発を行う。後者は世界結核デーだけではなく、年間を通してのキャンペーンの必要性や地域別の言語ごとのキャンペーンツールの作成を計画している。

今後、今回の調査をもとに効果的な啓発活動の効果を検討する場合、「ワヤン」を通じた啓発活動について、「シナリオ」と「プログラム」を啓発パッケージとして洗練させ、現地で啓発活動を実施する団体に対し継続的な啓発のツールとしての使用は有効であると考ええる。また、この方法は、ワヤンを通じた啓発活動は、結核に限らず、母子保健や栄養改善、予防接種など他分野にわたりパッケージ化の可能性をも含んでいる。

3.今後の活動について

結核の啓発活動としての効果的なツールとしての今後の実質的な方針について検討を行う。

1. 実施方法

今回の調査から、以下の4つの方法が考えられる。

その1) コミュニティを中心とした活動。

AKARAWA（アーティストグループ）が実施した方法。

当時つくられた脚本は存在しないが、人形はきちんと保存されている。

また、過去にいくつかの講演を実施した実績があるので、計画に対してプロセスを共有しやすい。活動及び会計の報告書の提出は可。

その2) 組織を通じた活動。

SENAWANGI（インドネシア・ワヤン協会）を軸として、進める。

USAIDによって実施されたエイズ防止キャンペーンの活動のような方法が考えられる。

SENAWANGIによってダランが集められ、ワークショップを行い、結核に関する情報を伝える。そして、各ダランがそれぞれの地域へもどり、それぞれがワヤンを行う際に結核に関する情報を交えて上映してもらう。ただし、報告を義務付けるところまでの拘束性はないので、SENAWANGIが調査に行って実際に実施したかどうかを調べる必要がある。

活動および会計の報告書の提出は可。

その3) 伝統的な「ワヤン」の手法を通じた活動。

有名なダランに依頼をし、彼らのネットワークを中心に進める。

⇒インドネシアの家族計画などのケースのように、専門家がダランに対して必要な情報を伝え、実演してもらう。実演の際には遊び歌「リングアン」「ゴロゴロ」のような休憩のと

きに情報を流してもらう。その際には保健所などから専門家に来てもらうこともできる。基本的に経費にかかる全ての金額をダランに支払い、実施してもらう。金額は高額。元来、芸術家なので活動や会計についての報告書の提出の期待は低い。

その4) 現代的な「ワヤン」の手法を通じた活動

彼らを支援している大学などを通じて活動を進める。

⇒ワヤンの活動について、時間の短縮や新しい音楽を取り入れるなどを行い、新しい試みを行っている。有名なダランに比べて経費は安い。

上記同様、元来芸術家なので活動や会計についての報告書の提出の期待は低い。

2.対象地域

⇒インドネシアは、東西5,110 kmに渡り、1万数千もの島々によって構成されており、多様な民族が住んでいる国である。NTPから全国の結核患者が多い地域を導きだす必要がある。また、患者発見率や治療中断が多いといった形で掘り下げていき、実際にワヤンによる活動が実現可能な地域を選定する。

3.実施機関

上記のワヤンによる啓発活動を実施するにあたっては、多くのステークホルダーとの協力が必要である。

カウンターパートには、活動をモニタリングし報告してもらうほか、健全な会計の実施も不可欠である。現段階ではこれらの条件に合う可能性がある団体は以下のとおり。

・ストップ結核パートナーシップインドネシア

我々の組織、ストップ結核パートナーシップ日本とは異なり、NTPの一部として存在している。保健所等の情報やアクセスが可能であり、また、結核NGOフォーラム（40団体が所属）をまとめているので、パートナーシップの窓口としての連携の可能性がある。

・インドネシア結核予防会（PPTI）

結核に関する活動の歴史がながく、全国に支部を有している。
コミュニティを対象とした啓発の活動の関わりも深い。
NTPが作っている結核に関する活動を行うNGOフォーラムの一つ。

・ワールドビジョンインドネシア

NTPが作っている結核に関する活動を行うNGOフォーラムの一つ。
GFのラウンド1では、サブレシピエントを担い大きな役割を果たした。
2010年までカナダ国際開発庁CIDAによって大きな支援を受け、東ヌサ・トゥンガラ諸島などで結核対策を行っていた。

・Yayasan Kusuma Buana（YKB）

医療と教育を中心とした国内NGO。JICA-NGOデスクから紹介を受けた。
1980年より活動を行っている。

今後組織の運営状態や活動状況、および、現地の結核対策の状況などを踏まえて、より効果的な結核の啓発活動の案件形成を目指していく方向である。



マクヌンガラ宮殿 ガムラン演奏
の練習の様子。

(終)